ISSN 0287-976X

むすんで、うみだす。

Lib.

京都産業大学図書館報
Vol. 46, 増刊号
(Dec. 18, 2019)

第15回 京都産業大学 図書館書評大賞

入賞作品掲載号

入賞者発表 2
選考経過と全体講評 3
入賞作品および講評
＜大 賞＞ 4-5
＜優秀賞＞ 6-11
＜佳 作＞ 12-21
アンケート 22
統計 23
概要 24

表紙：丸山　莉那（外国語学部　２年次生）

入賞者発表

第15回京都産業大学図書館書評大賞には57篇の応募があり，図書館書評大賞選考委員会で選考した結果，次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の 50 音順

大　賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』（著者名等）
はやし　ゆうすけ 林　祐輔	文化学部　国際文化学科 4年次生	火はいかにして起こるのか 『必要になったら電話をかけて』 （レイモンド・カーヴァー著 ； 村上春樹訳）

優秀賞

きむら　ももか 木村　百花	現代社会学部　現代社会学科 1年次生	人の気持ちを理解するということ 『幕が上がる』（平田オリザ著）
たかざわ　たつき 高澤　樹	文化学部　国際文化学科 4年次生	「見える」とは何か？ 『見えない人間』（ラルフ・エリスン著 ； 松本昇訳）
もりもと　ともゆき 森本　智之	文化学部　京都文化学科 4年次生	記憶の中に眠る青春の余韻 『さよなら妖精』（米澤穂信著）

佳　作

あさい　ひかり 浅井　日可里	文化学部　国際文化学科 1年次生	道化に潜む孤独と人間への求愛 『人間失格』（太宰治著）
えのもと　めい 榎本　明	文化学部　国際文化学科 4年次生	バッドエンドの童話たち 『幸福な王子 ； 柘榴の家』（ワイルド著 ； 小尾芙佐訳）
おおいし　ありさ 大石　有紗	文化学部　国際文化学科 3年次生	すれ違う心 『ノー・ノー・ボーイ』（ジョン・オカダ著 ； 中山容訳）
まつもと　みみ 松本　美々	法学部　法律学科 2年次生	ミステリーの異端書 『隻眼の少女』（麻耶雄嵩著）
みずの　こうすけ 水野　孝祐	現代社会学部　現代社会学科 1年次生	多くの視点と自分らしさを持つこと 『カラフル』（森絵都著）

選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会
図書館長　西村　佳子

今年の京都産業大学図書館書評大賞は６月24日，文化学部むすびわざブックマラソンとの共同企画，「トークセッション読書の楽しみ」で幕を開けた。第135回直木賞受賞作家で，本屋大賞や河合隼雄物語賞など数多くの賞を受賞されている三浦しをん氏と，日本文芸家協会理事で書評家としても活躍されている永江朗氏のトークセッションでは，三浦氏が作品の取材の話から，ご自身だけではなく交流のある作家の方の書き進め方まで，興味深い内容を率直に語ってくださった。このときの様子については，ぜひ図書館報『Ｌｉｂ.』のVol.46のno.２を見ていただきたい。

書評大賞との関連では，「ライブで聞く書評」ともいえる本の紹介がすばらしかった。三浦氏は「本なんて読みたければ読めばいい，読みたくなければ読まなくていい。」と突き放しつつも，「最近読んで面白かった本」という話題になると，それぞれが気になった本について，テンポよく本の内容や魅力を“トークセッション”で交わされた。そこには書評を書く上でのヒントが沢山あった。ある作家の作品の概要について簡単に紹介しつつ，同じ著者の他の作品との比較がなされたり，他の作家との作風の違いが論じられたりした。また，新刊本の紹介では，どのような点で既存の本にない新鮮さや発見があったのかについて語られた。私と同様に，この日，耳で聴いた“書評”があまりに魅力的で紹介された本をすぐ読んだ，という人も少なくないだろう。

さて，本年度の書評大賞には57篇の応募があり，第１次選考と第２次選考を経て審査員11名の全員一致で，大賞１名，優秀賞３名，佳作５名が選ばれた。大賞受賞者である文化学部４年次生・林祐輔さんの書評は，レイモンド・カーヴァー著，村上春樹訳の短編集『必要になったら電話をかけて』に収録されている「薪割り」について書かれたものである。林さんの書評には，薪を割ったときに主人公が感じた「何か」を知りたい，と切実に感じさせる文章力があり，昨年度に続き連続入賞した実力を感じさせた。優秀賞受賞者３名のうち現代社会学部１年次生・木村百花さんは，平田オリザ著『幕が上がる』について，自身の演劇経験を背景とした共感と舞台をつくることに関する気づきを述べた。文化学部４年次生・高澤樹さんはラルフ・エリスン著，松本昇訳の『見えない人間』を題材に見えるとは何かについて論じ，人の持つ承認欲求との関係に言及した。文化学部４年次生・森本智之さんは瑞々しい感性で，米澤穂信著『さよなら妖精』について謎解きだけではない青春小説としての魅力を論じた。

ここで書評を書く対象の作品の選び方について考えてみたい。本年度，応募された書評の大半が小説を対象としたものであった。プロの書評家ならあらゆる分野の本で書評を書けるかといえば，そうではない。この分野の知識がある，この分野が好きで好奇心があるという分野の本を読めば，他の人よりも多くの気づきが得られ良い書評が書けるだろうことは想像に難くない。例えば社会科学系の学生諸君で小説は苦手，という人の場合は国際政治に関する歴史本や評論，ノンフィクションを選んでもよいだろうし，理科系の学生諸君の場合は，科学者が書いた随筆を選ぶという選択もあるだろう。あなたの書いた書評で，その本を手に取ってみたいと思う人がきっといる。まずは自分の好きな分野，興味がある分野の１冊について書評を書き，次年度の図書館書評大賞に応募してもらえれば幸いである。

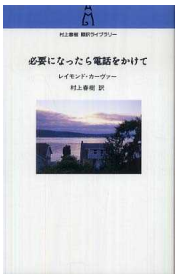
最後になったが，お忙しい中，選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方，図書館職員の方々，そして，ご協賛頂いた京都産業大学同窓会，丸善雄松堂株式会社，株式会社紀伊國屋書店の皆様にあらためて厚くお礼を申し上げる。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

大　賞

文化学部　4 年次生

林（はやし）　祐輔（ゆうすけ）



書 名 ： 『必要になったら電話をかけて』

著 者 ： レイモンド・カーヴァー著 ； 村上春樹訳

出版社・出版年 ： 中央公論新社 ， 2008

「 火はいかにして起こるのか 」

読書というと，どういったものを想像されるだろうか。先の見えない展開，奇想天外な出来事。屈託のない主人公が努力のすえ大逆転し，敵をやっつけるもの。読者は興奮し，続きが気になり，読み終えるまで夜も眠れない。

『必要になったら電話をかけて』の著者レイモンド・カーヴァーはそういった類のものを書く作家ではない。彼は現代アメリカを舞台に，どこにでもいるありきたりな成人男性（彼らは一様に妻のこと，子のこと，親兄弟のこと，仕事について頭を悩ませている）について，短く物語る。本書に収録されている「薪割り」は，アルコール中毒で入院していた男が退院するところから始まる。退院してすぐ，妻からの手紙によって彼女が別の男と関係を結び，彼の前から去ってしまったことを知る。彼は家さえ失ってしまった。新聞に載せられていた部屋の賃貸しの広告を頼りに，馴染んだ場所から離れた自然に囲まれた家に中年夫婦と一緒に住むことにする。男は深く沈んでいて，親切な彼らとの接触を避ける。日中部屋に籠もり，彼らがいなくなるとサンドイッチを作って食べ，夜に妻への手紙を書く。そんな生活を続けていたある日，一台のトラックが大量の丸太を裏庭に置いて行くのを目にする。これから寒くなるのを見越して，主人が頼んだものであるという。彼は主人に，薪割りをさせて欲しいと頼む。本当はこんなことをするいわれはないんだよ，と乗り気でない主人に薪の割り方や手順を教えてもらい，次の日から薪割りを始める。著者特有の洗練された，端的だが熱のある文章でその様子が詳細に語られる。

――彼はのこぎりのスイッチを入れ，丸太を挽いては，斧で割るという作業をかわりばんこにやった。気がつくと太陽は頭の真上にのぼっていた。彼は家の中に入って，サンドイッチを食べ，ミルクを飲んだ。外に出て作業を再開すると，肩は痛み，指はひりひりした。手袋をはめていたのに，刺(とげ)が何本か手にささっていたし，たこができ始めていた。それでも彼は作業を続けた。日が暮れる前にここにあるすべての丸太を挽いて，割って，積み上げてしまおうと心に決めた。これをやれるかやれないかは，俺にとって生きるか死ぬかの問題なんだ。なんとしてでもやりとげなくてはならないことなのだ。――

二日かけて薪割りを終えてしまうと，彼は家を出ていくことを主人に伝える。主人は何も言わず受け入れ，そこで物語は終わる。滞在期間はわずか一週間ほどだった。

あらすじを読んでみても，何が起きたのか理解されないことだろうと思う。なぜそこまで他人の薪割りに執着するのか。男はこれからどうなってしまうのか。著者の伝えたいことは何なのか。哲学もなければ教養もない。

著者はおそらく，こう言いたいのである。「深く心に感じたことは，容易く他人に伝えられるものではない」と。彼の小説には多くの共通点があるが，その終わり方にはいくつかのパターンが存在する。例えばこの薪を割った主人公が後日，友人にそのことを語るパターンである。薪を割った時に感じた「何か」。それを語ろうと試みる。だけれどうまく説明出来ないし，友人も理解することが出来ない。彼は薪を割っただけなのだ。しかしそこには何かがあった。うまく伝えることの出来ない何かを――それは希望でも絶望でもない――彼は確かに感じたのだ。

なぜそう言い切ることが出来るのか。私も読みながらはっきりと，それを感じたからである。そこには私の心を煮えたぎらせる何かがあった。誰かのまた聞きでもなく，ぱらぱらと流し眺めるのでもなく，実際にその物語に触れ，深く没頭することによって，あらゆる手段を以てしても伝えられないことを読者は汲み取り，共鳴することが出来るのだ。

他収録作品にも同様のことが言える。あらわすことの出来ない何か。やさしい言葉と美しい情景描写を徹底することによって著者はそれを伝えることに成功している。生半可な体験ではない。文字を介することのみで，そっくりそのまま他人になるのだから。読書は豊富な想像力を要し，それゆえ他媒体よりも体力も精神力も疲弊する。しかし，だからこそ感じられることがある。意を決して，この静かで何もない世界に浸ってみてほしい。めまいのするような濃厚な体験をすることが出来るだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　経営学部教員　宮永 健太郎**

私も「薪割り」を読んでみた。登場人物と舞台装置だけを決め，物語をなすがままに進行させ，その様を文字に起こしたかのような作品。“This is life.”とでも表現するしかない何かだけが，読後感として残る。「作品のモチーフは何か？」，「読者に何を感じてほしいのか？」，「そもそも著者は読者に何かを感じてほしいと考えているのか？」……これらはかなり曖昧で，しかもそれらを読者に悟らせまいとするようなところがある。人物の発話や地噺を中心に据え，ギャグやくすぐりは極力なくし，あとは聞き手の想像力に委ねる柳家系江戸落語（？）に近いものを感じた。

にもかかわらず，評者は「私の心を煮えたぎらせる」，「めまいのするような濃厚な体験」などのフレーズを次々に繰り出し，タイトルにも“火”という文字を使うなど，作品の世界観との対照の妙が実に印象的だった。おそらく評者は，作品に出会って文字通り心を揺さぶられたのであろう。その時の初期衝動を読者と共に分かち合いたい，との思いが行間からにじみ出ている。だがそれが空回りしていないのは，さすが大賞受賞作品。説得力はあるが無駄は少ないその頼もしい筆致は，数ある応募作品の中でも飛び抜けていた。

入賞者から一言

「ツマリソレハ，面白くやろうと思わないことだよ。」落語の神様と謳われた古今亭志ん生は，そのコツを問われてそう答えたという。面白くやろうと思わないこと。

こういった難しいものを扱う時，そのことばは私の慰めの壁となった。気取らず，走らず，小さな声で，正直に。それなら私にも出来る気がした。

高く評価して頂き，ありがとうございます。これを励みに，まだ書き続けようと思います。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

現代社会学部　1 年次生

木村（きむら）　百花（ももか）

書 名 ： 『幕が上がる』

著 者 ： 平田オリザ

出版社・出版年 ： 講談社 ， 2014

「 人の気持ちを理解するということ 」

“高校演劇”に全国大会があることをご存じだろうか？　年に一度行われ，地区，県，ブロック大会と進んだ学校が全国大会に行き，約一時間の芝居で優勝を競う。負けたらそこで終わってしまい，年に一回しかないため，高校野球の甲子園出場よりも厳しい世界であると言う人もいる。その一時間の舞台のために数ヶ月間も稽古を重ね奮闘する。この小説はそんな全国大会を目指し，部員たちが経験を重ねて成長していく物語である。

物語の舞台は，北関東にある高校の弱小演劇部。三年生が引退してしまい，部長としてこの物語の主人公であるさおりが選ばれる。そしてお嬢様キャラであるユッコ，独特のダンスを踊るムードメーカーのガルルの二年生三人で部活を盛り上げていくことになる。そして四月となり三年生となったさおりたちは，三人の後輩とともに活動していく。だが，顧問は演劇に関しては素人なため，部員たちは部活としての方向性が定まらないまま活動していた。しかしある日，学生演劇の女王と言われ，学生時代東京の小劇場で名をはせた吉岡先生がさおりたちの高校に赴任してくる。さおりたちの説得により，吉岡先生は演劇部の副顧問となり，部員たちに全国大会への出場を意識させる。そんな中，過去に全国大会にも出場した高校演劇の強豪校から中西さんが転校してくる。最初は演劇部に入ることをためらうものの，さおりたちの話し合いによって部員となる。全国大会に向けて切磋琢磨するも，部員たちのすれ違いや，吉岡先生のことなど様々な難題に直面する。しかし，そのような中でも決して諦めず，目標に向かって努力していく青春物語である。

最初に読んだ時，口語的に文章がかかれており，日記のような感じで少し読み込むまでに時間がかかるなと感じていた。感情移入できるか不安であったけれど，登場人物の個性がはっきりとしており，さらに高校生ならではの悩みや葛藤がリアルに表現されていて自分自身の高校時代での思い出が蘇ってきた。また，私も高校時代は演劇部に所属して大会に向けて部活に励んでいたので，この本に出会ったとき，自分自身の部活での活動に共感した部分も多くあり，演劇部で活動していた頃の青春時代を思い出させてくれた。

筆者は単純に「演劇って素晴らしい」「もっと演劇の世界を知ってもらいたいし，広めていきたい」と思い描いただけではないのだなとページをめくっていくたびに考えさせられた。

優秀賞

そうではなくて，他人と自分はもちろん考え方は違うし，人の気持ちを理解することは難しい。けれど，そのことに消極的にならずにプラスに捉えていけば，日々を楽しむことができるだろう，そのようなことを筆者は読者に伝えたかったのではないのだろうか。ユッコが，受験と演劇の大会が被ってしまったことをさおりに相談せず気づかなかったとき，さおりはそのことに悩みこまず，否定的に捉えなかった。また，中西さんと会話するとき，ぎこちなさがありつつも，彼女は積極的に話しかけ演劇を通じて仲良くなっていった。そんなふうに物事を前向きに捉えていく主人公の性格や感情が，この物語を優しく，そして清々しい気持ちにさせてくれるのだ。

私がこの物語で印象に残っている言葉がある。「スポーツと違うから，みんなが一体になる必要なんてない。どれだけ違うか，どれだけ感性とか価値観とかが違うか分かっていた方がいい。バラバラな人間が，バラバラなままで，少しずつ分かり合うのが演劇」。吉岡先生が演劇部員に向けて送った言葉だ。他人の気持ちなんて，当たり前のことだけどすべて理解することはできない。伝えたいことを上手く言葉に表現できず，相手に伝えられなくてモヤモヤすることだってある。世界には様々な人がいて色々な意見を持っている人がいて，多様性に満ちあふれているのだから分かり合えないのは当然だろう。しかし，それでも人は他人と関わり合い，模索しながら刺激を与えあい，人は成長していく。そのようなことを，この高校演劇の舞台を通して改めて気づかされた。演劇というものは様々な個性があるからこそ，それにあった役柄やキャラができ，舞台が成り立つ。それを役者たちが演じていく中で，お互いの個性を分かり合って初めてその世界，お芝居の世界ができるのではないか。この物語を読めば，きっと人との関わり合いについて考えさせられるだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　国際関係学部教員　山本　和也**

本作品は，高校部活動というありふれた世界を描くことで，平田の「現代口語演劇理論」を体現している。淡々とした日常の叙述はしかし，主人公さおりが自ら作り上げた演劇の意味を公演中に悟るというクライマックスで，作品の解釈へと転調する。進路，家族，いじめと，「等身大のふりをして高校生の問題をわざと深刻に描く」(p. 268)芝居を嫌うさおりは，自らの作品に描いた多くの人とのごくありふれた出会い，若さゆえの漠然とした不安，そしてそれらを通じた成長こそが「高校生の日常」であると気づく(pp. 323-330)。それを主人公の無意識にずっと留めておくこと，そして大人が作りがちな「等身大の高校生の日常」に代えて「本当の日常」を主人公の意識へと突如あぶり出す展開によって，平田の演劇論を何重にも強調していることが，本作品の魅力である。

評者は，上述の主題の中から，多くの人との交流で必然的に生じる「人々の違い」に注目し，その大切さを明らかにしている点に本作品の意義を見出している。これは巻末の解説(阿川佐和子)と同じ視点であるが，高校生からほど遠くない評者が述べる点で意味深い。演劇部に所属していた評者には，登場人物の多様性が自身の経験とも重なったかもしれない。それはまさに，「等身大の高校生の日常」ではない「本当の高校生の日常」が若者の心を打った瞬間であり，平田にとっても本懐であるに違いない。

入賞者から一言

授業の一環で申し込んだのですが，まさか受賞するとは思わなかったので驚いています。優秀賞を頂くことができて光栄に思っています。自分自身思い入れのある１冊で受賞できて嬉しいです。これを機にもっとたくさんの本に触れていきたいと思いました。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

文化学部　4 年次生

高澤（たかざわ）　樹（たつき）

書 名 ： 『見えない人間 ； 1， 2』

著 者 ： ラルフ・エリスン著 ； 松本昇訳

出版社・出版年 ： 南雲堂フェニックス ， 2004

「『見える』とは何か？ 」

突然だが，あなたは自分の存在を周囲に認められているだろうか。もしくは，自己実現に向けて何か努力をしているだろうか。アメリカの心理学者のマズローは，人間には 5 段階の欲求があり，社会的欲求や承認欲求，自己実現欲求があることを提唱した。これらは人間の本質であり，多くの人がそれを実現させてきた。しかし，そのような承認欲求を一切認められない人々が過去には存在する。その中にはアメリカ社会の黒人たちも含まれる。アメリカ社会では奴隷制が終わってからも黒人を取り巻く環境は改善されなかった。奴隷制では黒人は家畜同然であり，人間として扱われることは無かった。黒人が自由になってもその一人一人を評価されることはほとんどなかったのである。その様な一人の人間として扱われることのなかった彼らはどのような思いをしていたのだろうか。ラルフ・エリスンの『見えない人間』はそういった黒人から見たアメリカ社会を描いた作品である。

主人公である「僕」は，黒人であるがゆえに周囲の白人から一人の人間として扱われず，「見えない人間」となっている。彼は，ビルの地下にある忘れ去られた地下室（彼は穴ぐらと呼んでいる）で，電気を不正利用するなど社会に反抗しながらも自身の存在に気づいてもらおうとしながら生活している。子供の時から「僕」は自分の夢を持ち，それを実現させるために，大学に進学したのだが，慕っていた教授に難癖をつけられ，退学させられる。その後ペンキ工場で働いたり，ニューヨークのハーレム地区を仕切るブラザーフッド協会に所属したりして活動をするが，暴動に巻き込まれマンホールの中に逃げ込む。冒頭の語りはそこから数年後にマンホールから出た後である。読者は彼が語るこれらの 20 年前から続く出来事を聞き，どのようにして「見えない人間」となったのかを知ることになる。

さて，作品の題名にもなっている「見えない人間」とはどのようなものなのだろうか。多くの人は怖い話に出てくるような透明人間を想像するだろう（実際この作品の原題は“Invisible Man”である）。しかし，そういった心霊の類のものではないということは冒頭の「僕」によって否定されている。では，彼は一体何が「見えない」のだろうか。それは個性である。ここから考えられることは，「僕」が「見えない」のは，一人の人間としての個性である。彼はしっかりとした考えを持ち，行動もできる普通の人間であるが，白人からは黒

優秀賞

人というだけで「数ある黒人の内の一人」というフィルターがかかるのだ。実際「僕」が夜中に外を歩いているとき，白人とぶつかり，けんかになったが，その白人は彼を黒人と分かるとまるで彼が見えないかのようなそぶりを見せる。直前まで口論をしていたにもかかわらずフィルターだけで一人の人間とは考えなくなるのだ。また，フィルターが無く，彼の才能を評価する人も作中には登場するが，その才能を利用するだけ利用してから彼を見捨てるという便利な道具のようにしか見ていないのである。こういったことは白人だけではなく，同じ黒人同士でも発生している。こうした裏切りを何度も受ける中で，彼は自分が「見えない人間」であることを悟るのである。

彼は物語における現在で，自分の存在を人々に認めさせる野望を持つが，うまくいかない。これには黒人差別の他に重大な理由がもう一つある。彼には名前が存在しないのである。ただ，産まれた時から名前がないわけではない。大学を追い出されてからペンキ工場にて働いているときに爆発事故に巻き込まれ，名前の記憶だけが消えてしまったのである。このため物語中では彼を「僕」のみで表現している。このせいで彼は自分を表す固有名詞を持っていないことで，自分でも他人にも己を定義できない。名前がないものは，知りようが無いのだ。そして，承認欲求はあるのに承認されるものが何かも分からない。「僕」は，自分がもしかしたら本当に見えていないのかもしれない，と告白しているが，自身の名前が分からないことが彼の存在をあいまいにしていると言っていいだろう。名前がないということは，読者にもなかなか厄介な問題を与える。作品を語るとき登場人物の名前を出すことが多いが，この作品においては「僕」の名前がないため，作品を読んだことのない人には説明が難しくなるのである。この作品を読んだあなたは果たしてどのような形で彼を呼ぶのだろうか。

『見えない人間』は差別意識が残る 1950 年代のアメリカにおける，黒人から見た世界を告発している。「僕」のような一人の人間として認められたい人々の思いは，SNS を通じて簡単に承認欲求を満たすことが出来る現在にも通ずるものがあるだろう。今一度この作品を通して，自己実現について考えるべきだ。あなたが SNS で貰った「いいね！」が本当に自分自身を見てのことなのかを見直すいい機会になるだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　現代社会学部教員　菅原 祥**

この書評では，人間が社会的に「透明」な存在になってしまうとはどういうことなのかが丁寧な文章で描き出されている点に好感を持った。また，ある社会においてある特定の人々が「透明」な存在にされてしまうメカニズムにおいて，その人々の「名前」や「名付けの権利」が奪われるという暴力的経験が重要な役割を果たしているという点を指摘してくれたところも，この書評の非常に的確な点である。

ただ，この書評の最後の SNS との比較の部分は蛇足であると感じた。きっと評者としては本作で描かれているような状況を現代の日本社会の中にも見出したいと思ったのだろうが，であれば別に SNS など持ち出すまでもなく，現代の日本においてもまたさまざまなマイノリティ，在日外国人，社会的弱者などが日々「見えない」存在にされているのは周知のとおりである。そのような目配りがあれば，この書評もよりクリティカルなものになったのではないかと思う。

入賞者から一言

二年前のリベンジができて良かったです。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

文化学部　4 年次生

森本（もりもと）　智之（ともゆき）

書 名 ： 『さよなら妖精』

著 者 ： 米澤穂信

出版社・出版年 ： 東京創元社 ， 2006

「 記憶の中に眠る青春の余韻 」

あなたは小説を手に取りそれを読む時，その物語に何を求めるだろうか。空き時間の暇つぶしとしての娯楽， はたまた作者が張り巡らす緻密な謎がもたらす好奇心や刺激かもしれない。しかし，小説の中には「忘れ難い余韻」を読後に残すものがある。その余韻がもたらすものは普段感じる小説の魅力とはまた違ったものへとあなたを誘うだろう。

米澤穂信の『さよなら妖精』は，主人公である大学生の「守屋路行」が，高校時代に出会った異国の少女「マーヤ」の帰国後の行方を追うミステリ小説である。小説は 1992 年 7 月から幕が上がり，彼女の帰国先の手がかりを探すために，彼女と出会った 1991 年 4 月からの日記を読み返すことで話が進んでいく。彼女との出会い・高校時代最後の部活・仲間と過ごす休日の出来事――。記憶の中に眠る「マーヤ」との謎に満ちた 2 ヶ月の日々が，彼女の居場所を見つけ出す鍵となり，主人公最大の謎解きへ繋がっていく。読者に「忘れ難い余韻」をもたらす彼女の行方とは――。

この作品は物語の大半が主軸の謎解きである「マーヤ」の行方の捜索を行っている「現代」で語られるものでなく，異国からきた彼女との出会いから別れまでの 2 ヶ月間を日記や回想で語る「過去」の話となっている。日記は主人公である「守屋路行」の語りで，異国ユーゴスラビアの少女「マーヤ」を発端に起こる日本人と外国人の言語や文化の違いの摩擦が謎となり主人公がそれを解き明かすという構成になっている。

このように今作品において主人公「守屋路行」は物語全体で「探偵」の役割を果たし，異国の少女「マーヤ」は謎を投げかける「依頼人」もしくは「謎」そのものとしての役割を持つものとして描かれている。しかし彼らはまた別に本作品が「忘れ難い余韻」を残すと評する小説として成り立つ役割を担っている。その役割とは主人公「守屋路行」には「普段の日常に対する葛藤とそれを打破しようと足掻く若者」としての役割・異国ユーゴスラビアの少女「マーヤ」には「人生経験を積み若者を諭す年長者」としての役割である。これら二つの役割は物語中盤以降に姿を現し，物語の結末を「忘れ難い余韻」とするべく読者の心を大きく掴むものとなるのである。

主人公は中盤に，日常の小さな謎と共に非日常的な経験をくれる「マーヤ」の存在に羨み，憧れを抱き始める。そして彼女の真っ直ぐな生き方や信念に触発され，自身がその姿に近づこうと行動を起こすのだ。この時の守屋少年の心理は，日々に退屈し，現状打破を試みる青

優秀賞

臭い少年の心理として描写されている。「おれたちは同じ円の中にいる。その中で競い，その中で勝ちあるいは負ける。そして，誰も胸を張って言いはしないが，この円の中にいるそれだけで実は生きてはいけるようだ。」「その円の中にマーヤが飛び込んできた。」「向こうからこちらに来られるのなら，こちらから向こうに行くこともできるに違いない。ひょっとするとそのことによって，おれはただ円の中にいるのではなくなれるかもしれないのだ。」これらの言葉は守屋少年が自身の過ごしている日々や，周りの人間関係を円に例え表現している描写である。憧れを原動力に自身の現状を打ち破り，現状とは違う何処かに行こうとする守屋少年の姿は，読者それぞれが持つ今までの経験と重ね合わされ，心打つものになるのではないだろうか。そして思い悩んだ末に主人公は『「マーヤ」の故郷に一緒に行くことが自身の人生を変える手段だ』と決断し，帰国直前の彼女に故郷に連れて行くよう申し出る。しかしその決断を「マーヤ」は頑として拒絶する。憧れや現状打破の願望から発せられる上辺の懇願を彼女は拒否するのだ。この彼女の態度は，大学生となった主人公に自身の未熟さを知らしめる経験として心に残るものとなる。このように２人の役割は、若者視点からの共感と年長者視点からの共感を生み出す作用になっている。そしてここで生まれる共感が読者を「忘れ難い余韻」溢れる結末へと導くのである。またミステリ小説としての「探偵」と「依頼者」という役割を担う２人が，小説全体を見ると「若者」と「年長者」という見方に変わる点は，教え請うという立場の逆転を感じさせ，作者の小説の構成の巧みさを感じずにはいられない。

この作品はミステリ小説であるものの，実態としては若者の葛藤を描き，ミステリでそれを包み込んだ青春小説といった方が良い。もし本作品に本格的なミステリ要素を求める読者がいるとするならば，物足りない思いをさせるかもしれない。しかし「マーヤ」との交流の中で生まれた主人公の思いや行動は，読者の誰しもが駆け抜けてきた青春と重なり，物語の生み出す読後の余韻に繋がるであろう。読者であるあなたが駆け抜けた日々，それによって生まれた感情が，本書の結末をあなただけの「忘れ難い余韻」をもたらすものへと昇華させるのである。

選考委員による講評　　**選考委員代表　法学部教員　若狭　愛子**

書評が書物を紹介・批評する文章であることは，言を俟たないところであろう。紹介は，対象書物のあらすじや作者の情報などを簡潔明瞭に，また読み手の興味を引くように記せば大方の役目を果たしたといえよう。難しいのは「批評」である。批評は感想ではない。客観的に対象書物の長短や優劣を指摘し，それに対する自分の評価を述べなければならない。

評者が取り上げた米澤穂信氏の『さよなら妖精』は，2017 年に実写映画化されたことで記憶に新しい『氷菓』に始まる作者の古典部シリーズの３作目として執筆されたものが，出版事情により独立した作品となったことは，すでに作者自身が語っているところである。

さて，本書評ではそのあたりの変遷や作者の他作品との比較はされていない。また，作者の大学時代の研究テーマであり，思い入れのあるユーゴスラビア紛争についての記述もされておらず，主人公の名前も「守屋」を「守谷」と表記する（注）など，粗削りな部分が目につく。それにもかかわらず，選考委員の多くが概ね高評価であったのには，評者が等身大の感性で，自らの言葉で本作品を批評しようとしたからであろう。

（注）書評本文の表記については誌面編集の段階で修正いたしました。(Lib.編集担当)

入賞者から一言

優秀賞をありがとうございました。段々と文章を書くコツなんかが分かってきたみたいで楽しく書けました。今年で卒業ですが，社会人になってからも文章を書いたりするのを趣味にしたいと思います。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

文化学部　1 年次生

浅井（あさい）　日可里（ひかり）

書 名 ： 『 人間失格 』

著 者 ： 太宰治

出版社・出版年 ： 新潮社 ， 2006

「 道化に潜む孤独と人間への求愛 」

人とより良いつながりを作り，また会話を弾ませようとする時私たちは「道化」を使うのが有効だ。私たちはこの「道化」を人とのコミュニケーションをとるために使い分けが可能な道具として用いる。しかし世の中の全員がこれを使いこなせるわけではない。

『人間失格』の主人公は葉蔵で，太宰治が経験した感情などが多く記述されていると言われている。葉蔵は隣人との会話などの人間の営みが理解できなかった。その時，考え出したのが「道化」だった。本書では「それは，自分の，人間に対する最後の求愛でした。自分は，人間を極度に恐れていながら，それでいて，人間を，どうしても思い切れなかったらしいのです。そうして自分は，この道化の一線でわずかに人間につながる事が出来たのでした。」と述べている。本書には「最後の求愛」としての「道化」を使い続けた葉蔵が廃人になるまでの記録が「第一」，「第二」，「第三」の手記に 3 つに分かれ書かれている。

初めに述べた通り，本書は太宰治自身の記録といっても過言ではない。太宰の非合法運動や度重なる女性関係や自殺未遂，薬物中毒，アルコール依存，などおよそ経験した本人にしかわからない出来事が書かれているからである。故に，太宰の告白本ともされる本書及び太宰治に出版当時から現在に至るまで数多くのファンが魅了されている。しかし，太宰の一生について記述されているのは本書だけではない。『東京八景』という昭和十六年に発行された作品がある。この作品は本書とは違い，一人称視点で物語が進んでいく。またこれは，太宰の年表と見比べて読んでほしいのだが，こちらの方がかなり太宰の人生そのものと重なる部分が多い。例えば女性関係について，実際に初めに妻になる初代についても，詳しく書かれている。しかし，なぜ太宰治の代表作に『人間失格』の方が頻繁に挙げられるのか。

私は，理由は 2 つあると考える。1 つは太宰が新戯作派の作家であったことだ。『人間失格』以前の作品に『お伽草紙』という昔の作品を模倣した新戯作派の太宰作品がある。この作品は太宰の「道化」の精神を感じられる作品の一つであり，当時のファンも太宰治の「道化」に魅了されていたことがわかる。つまり，この『お伽草紙』が発表された時点ではまだ「道化」に包まれた太宰の本心に触れた人はいなかった。しかし『お伽草紙』が出版されて三年後，すなわち太宰の死直後の昭和 23 年に出版された『人間失格』でファンは初めて太宰治

自身の苦悩を，葉蔵を通して知ることになる。太宰の幼少期から抱えた人間への恐怖心，またそれから逃れるため女性に「幽かな一夜の休養」を求めるうち「女達者」になり，そこから始まった数多くの女性関係などだ。そして『人間失格』の第一の手記から「恥の多い生涯を送って来ました。」という衝撃的な文頭がより鮮明に読者に葉蔵及び太宰の「告白」を印象付ける。また，前に述べた『東京八景』では，明かされなかった太宰の女性関係が多くなった理由，根本的な人間への恐怖が述べられているのも累計発行部数を伸ばし，より『人間失格』を太宰の代表作にした原因の１つと考えられる。

２つ目は,『人間失格』の最後の文章である。この最後の文章とは，葉蔵の「第三の手記」ではない。はじめに本書は３つに分かれていると説明したが，実際には葉蔵の年齢別の３枚の写真を見た人物の視点で書かれた，葉蔵の手記の前ページの「はしがき」と後のページの「あとがき」が存在する。その「あとがき」部分の最後の部分であり，また，この会話は葉蔵の様々な出来事が起こったはるか後に交わされたものだ。

「私たちの知っている葉ちゃんは，とても素直で，よく気がきいて，あれでお酒さえ飲まなければ，いいえ，飲んでも，……神様みたいないい子でした」と葉蔵のことを知っている京橋のバアのマダムが手記を読んだ人物に，葉蔵について語る場面の一言である。この２人は葉蔵が残した手記を唯一すべて読んだ人物である。つまり，葉蔵の「道化」に隠されていた葉蔵のありのままの苦悩や葛藤に触れた人物たちだ。社会的に見れば薬物中毒，アルコール依存で廃人同然であり，また誰に対しても「道化」を使い本心を明かすことなく去った葉蔵だがマダムは手記を読みそれでもなお，葉蔵を「神様みたいないい子」と語った。私は，この一言が本書を手に取り最後まで読んだ読者を，マダムが代弁しているように感じる。この最後の最後に登場人物と，読者の感想が重なるように構成されたこの文章が現代においても太宰作品を代表する魅力の１つだと考えられる。

これらの理由から，本書は現代においても太宰を代表する作品になったと考える。また，前述のとおり本書が出版されたのは太宰の死後だから実際に彼の私小説かは定かでない。この事実も太宰の「道化」のようで面白い。しかし，あなたは大切な人を「道化」無しに見ているか。本書を読んで考えてほしい。

選考委員による講評　　**選考委員代表　情報理工学部教員　瀬川　典久**

個人的なことであるが，私は，普段，文学作品を読まないし，本屋，図書館に行っても文学作品を手にとって読むことはない。ただ，新聞などに掲載されている書評で，気になる作品はチェックすることにしている。

今回私が書評を評価した最大のポイントは，私みたいな偏った読書履歴を持つ人間がその書評を読んで，その本を読んでみたいなと思わすことができるかどうかという点である。今回，選考させて頂いた本書評は，太宰治の有名作品で，すでに数多くの書評が出ているが本書評の考察は，新たな発見を私に与えて，読んでみてもいいなと思わせた。

良い書評は，普段読書をしない人に，気づきを与え，読書の機会を与えると信じている。私に，いい機会を与えていただき，ありがとうございました。

入賞者から一言

まさか選ばれると思っていなかったので今回の選出はとても嬉しかったです。私の文章能力は時と場合によって差が激しいので，これからは安定して正しくわかりやすい文章が書けるように練習します。最後になりましたが，今回はありがとうございました。来年も挑戦します。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

文化学部　4 年次生

榎本（えのもと）　明（めい）

書 名 ： 『幸福な王子 ； 柘榴の家』

著 者 ： ワイルド著 ； 小尾芙佐訳

出版社・出版年 ： 光文社 ， 2017

「 バッドエンドの童話たち 」

童話は子どもだけのものだろうか。確かに子どもが読むことを前提としているため，わかりやすい普遍的な教訓が含まれていることが多い。しかし大人だからこそ，物語のテーマを深く理解できるような作品も多く存在する。時には子供向けとは思えないほど，過激なテーマを含む童話もある。

オスカー・ワイルドの『幸福な王子／柘榴の家』は，そんな大人のための童話集といっても過言ではない。本書には９作の童話が収められ，なんとそのうちの７作は登場人物が死ぬ悲劇的な結末だ。表題作でもある「幸福な王子」は，宝石で装飾された美しい王子の像が燕に頼んで，街の貧困にあえぐ人々のために，その身体を分け与える話である。ここではキリスト教的美徳として，王子と燕の「自己犠牲」からくる美しい死を描いているのだ。しかし街の市長や教授らは，金箔も宝石も無くなってみすぼらしくなった王子の像を「美しくなければ，もはや無用の長物である」といって燕の死体と共に燃やしてしまう。王子と燕は世間からは正当に評価されないものの，しかし最後には神によって救われる。「幸福な王子」には悲劇の中にも教訓が含まれている一方で，「王女の誕生日」にはそんな救いさえない。

スペインの幼い王女のための見世物として，ある小人が森から連れてこられた。足も曲がっている小人は，自身が醜いことに一切気づいていない。だからこそ彼の踊りはより滑稽で，大笑いした王女は頭に挿してあった白い薔薇を小人に投げる。彼はその美しい王女に恋をして，もう一度会うために王城を探し回る。ある部屋で，彼は背も低く足も曲がった醜い化け物と出会った。そして，それは鏡に映った自分であると気付いた小人は泣き出し遂には心臓が破れて死んでしまう。

これは本当に童話かと疑問に思う程，小人に同情し胸が痛くなる物語である。また実はこの作品，前半のほとんどに小人が登場しないばかりか，童話に似つかわしくない情報ばかりなのだ。王女の父親である国王がいつも亡き妻のミイラの傍に寄り添っていること。若き国王・王妃の結婚式には多くの異教徒が殺されたこと。王女の叔父であるジョン・ペドロが国王を恨んでいること。ワイルドの美しくきらびやかな文体で，子供向けとは思えないこれらのドロドロとした現実が描写されるのだ。それによって読者は「美しいのに不気味」という奇妙な感覚を覚える。過度な文体の装飾が，理不尽で残酷な物語をより不気味に引き立たせているのだ。

残酷な現実も含まれる一方で，小人登場後は花や動物たちが言葉を話す童話的なファンタジーも描かれる。和やかな場面かと思いきや，庭園の美しい花や木はこぞって小人の醜さを笑い，中傷しているのである。彼らは王女が喜んで投げた薔薇でさえも，美しい王女から醜いこいつが盗んだのだと怒りをあらわにする。小人の醜さに対し同情的な花もいたが，それでさえ内心「あんな滑稽で愚かしい真似をせずに悲しげな顔をするとか，せめてものおもわしげな表情をうかべていたならば，もっとましに見えるだろうに」と思っているのである。蜥蜴や鳥は食べ物をくれる小人のことをそれなりに好いているが，花たちはそんな蜥蜴や鳥も卑しい存在として蔑んでいる。動植物の声は人間には聞こえない。自身が醜いことも知らない小人は花も蜥蜴も鳥も大好きであったし，あの美しい幼い王女から愛されると信じている。

「あのひと（王女）は美しい白薔薇をくれたし，おれを愛している。」「そうだ，あのひとは森にきて，おれといっしょにあそばなくちゃ。」

読者である私たちは，彼が醜いと蔑まれていることも，彼の妄想が現実になることはないのも知っている。だから胸が痛むし，またなぜか罪悪感を覚えてしまう。庭園の美しい花の様に，私たちの中にもこうした容姿に対する残酷な考えが，果たして全くないといえるだろうか。醜い容姿を持つ者が，それに気付かず自信ありげにふるまう。それは王女の様に滑稽だと笑い，花たちの様に蔑んでいいようなことなのか。

鏡に映った化け物が自身であることに気づいた小人は，絶望しその場に泣きながら倒れ伏す。そこにやってきたあの美しい王女がもう一度踊れと命じるが，彼は既に死んでいた。それを侍従から聞いた彼女の一言で物語は幕を閉じる。

「これからわたくしのところに遊びにくるものは，心臓などないものにしてちょうだい」

美しいからこその傲慢，子供ながらの純粋な残酷さが現れたその一言は，私たちの中にある差別意識への皮肉にもなっている。「幸福な王子」のような分かりやすい教訓ではないにしろ，我々の内面に突き刺さる毒のような教訓だ。「心臓のない」人間にはなりたくないものである。

選考委員による講評　　**選考委員代表　現代社会学部教員　菅原　祥**

「童話」や「児童文学」には，ときに大人のための文学以上の普遍的なメッセージ性が込められていることがある。それは，まさに「童話」という物語形式を取ることによってはじめて可能となるようなメッセージ性であろう。この書評では，そうした童話が有する普遍的価値がワイルドの作品を例として的確に指摘されている。特に「我々の内面に突き刺さる毒」という評者の表現に端的に表現されているような，オスカー・ワイルドの童話が持つ特有の残酷さ，厳しさ，そしてそれにもかかわらず我々の胸を打つような美しさが，的確にとらえられている点は，この書評の大きな美点であると思う。

一つ注文をつけるとするならば，もう少し評者独自のオリジナリティある視点や一歩踏み込んだ読解が欲しいと感じた。その点はやや物足りない点ではある。今後はそうしたオリジナルな「読み」の可能性も意識しながら，文学を読む楽しみを大切にしていってほしい。

入賞者から一言

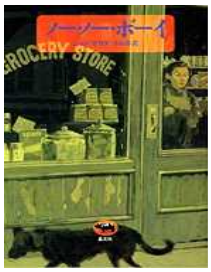
学生生活の中で２度もオスカー・ワイルドの作品で受賞することができ，大変光栄に思っております。卒業論文でワイルド作品を扱い，独特な世界観を伝えるのに悪戦苦闘している中でこのような賞をいただけて大変嬉しく思いました。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

文化学部　3 年次生

大石（おおいし）　有紗（ありさ）



書 名 ： 『ノー・ノー・ボーイ』

著 者 ： ジョン・オカダ 著 ； 中山容訳

出版社・出版年 ： 晶文社 ， 1979

「 すれ違う心 」

日本軍の真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争。1945 年に終結したその戦争では，多くのアメリカ人と日本人が命を落とした。アメリカ人としても日本人としても確固たる居場所がない。アメリカに住む日系アメリカ人――彼らもまた戦争の犠牲者であった。『ノー・ノー・ボーイ』は，日系アメリカ人作家ジョン・オカダが自身の体験を元に書いたフィクションである。日系アメリカ人をテーマにした小説の先駆けともいえる作品で，戦争終結後のアメリカを舞台に，日系アメリカ人の若者達の苦悩を描いている。

太平洋戦争の勃発を機にそれまで平穏に暮らしていた日系アメリカ人の生活は一変した。非国民のレッテルを貼られた彼らは収容所に連れていかれ，男は志願兵になるかどうか，YES か NO の答えを迫られる。この物語の主人公イチロー・ヤマダは，NO，NO と答え，２年間刑務所に入る。戦争終結後，解放された彼は家族や友人がいる故郷のシアトルに帰る。母親は戦争に行かなかったイチローのことを誇らしげに褒めるが，日本が負けたことをなかなか受け入れられず，彼女の精神は徐々に壊れていく。主人公はそんな母親の姿を見て，自分は何のために徴兵を拒否したのかわからなくなり，母親とも対立するようになる。弟は志願兵にならなかった兄にたてつき，両親の反対を押し切り高校をやめて軍隊に入る。イチローはそんな生活の中，かつての友人ケンジと再会する。戦争に行った彼は，足を無くして不自由な生活を送っていたが，懸命に生きていた。２人は共に別の町で新しい生活を始めようとしていた矢先，足の怪我が原因でケンジは死ぬ。イチローの母親も２人の息子に家を出ていかれたことを悩み自殺する。イチローは身近な人物の死を目の当たりにし悲しむが，物語の最後では生きていくためにそれぞれの思いを胸に希望を追い求める。この物語で最も印象的な部分は，親世代との価値観の違いに悩む日系２世の子の姿である。

例えばイチローの母は，戦争に行った息子の友人やその親を，日本人としての真の強さがなく，祖国に歯向かったみじめな人間であると罵倒する。これに対しイチローは「日本人だってことのどこがいいんだい」と反論する。日系アメリカ人２世として生まれ育ったイチローは，アメリカで生きていくために覚悟を決めて戦争に行った友人や子供を送り出す親の気持ちが理解できる。だからこそ，日本人としての誇りを持ち続ける母親に苛立つ。また友人

であるケンジの父親は主人公の母とは違った考えを持つ。ケンジは戦時中に殺したドイツ兵のことが忘れられず苦しみ，また戦争で足を無くしたことが原因で亡くなる。彼の父は息子が亡くなった日にイチローにこう話す。

「あの子はいい子で，気持がよく，思いやりがあり，みんなから好かれたのに，一度もしあわせになれなかった。…〔略〕…あの子のためには，わたしはよくおもうんだが，わたしはアメリカになんか来るべきじゃあなかったってね。あの子のためには，わたしは日本にいるべきだった。そこにいれば日本人として，ほかの日本人と一緒にして，そうしたら，たぶん，死ぬこともなかったかもしれない。…〔略〕…」

ケンジはアメリカで生きていくために志願して戦争に行き，そのことを死ぬまでずっと後悔していなかった。しかし，父親は息子を亡くしたことをきっかけに，アメリカ移住を決断した自分の生き方に疑問を持ち後悔する。こうした文章や登場人物の様子から，私達は１世と２世の考えの相違を目撃することができる。

この小説の著者であるジョン・オカダは，実際は志願兵として戦争に行っている。志願兵として行った者が，なぜ行かなかった者を主人公にした小説を書いたのだろうか。この小説でイチローは，戦争に行かなかった自分の内面だけでなく，戦争に行った友人が語った体験やその父親との会話から，自身が選択しなかった人生も見ている。どちらを取り上げても，戦争や自分自身の選択に悲観的な１世と，戦後生き抜いていこうとする２世の修復しがたい溝があることがわかる。この物語は日系アメリカ人をテーマにした小説の先駆けだからといって，日系人がアメリカで差別された苦しみを描いているだけではない。戦争を機に，徐々に浮き彫りになってくる親世代とのギャップに悩む若者を通して，当時の日系アメリカ人の苦悩を私達に伝える。ぜひこの本を手に取り，太平洋戦争後の激動の時代を生きた日系アメリカ人に関心を持ってほしい。

選考委員による講評　　**選考委員代表　国際関係学部教員　山本 和也**

第二次世界大戦への従軍を拒否した日系アメリカ人イチローの苦しみを，従軍した知人，イチローと同じく拒否した知人，両親と弟，隣人，そして白人，黒人との関わり合いを通じて多様な角度から描いた本作品は，アメリカにおけるマイノリティの困難を重厚に描いた秀作である。

なかでも評者は，そこに描かれた１世と２世の世代間ギャップに注目している。一括りに日系人と言っても，やがては「帰国」を夢見る１世ともはや「アメリカ人」として生きる２世との間の隔たりは大きい。１世の中には，帰国を諦め切れない者，反対に同化を受け入れる者，さらには渡米自体を後悔する者がいる。他方２世には，親のために従軍を拒否した者とともにアメリカ人になることに懸命な者がいる。訳者解題にもあるように，こうした人間模様は３世，４世が加わることによって，現実のアメリカ日系人社会では一段と複雑になる。本作品の大テーマを掘り下げたこの書評は，『ノー・ノー・ボーイ』の世界，そしてアメリカ移民問題へと巧みに誘う佳編である。

入賞者から一言

この度は佳作に選んで頂きありがとうございます。作品の良さを文字で伝える難しさを知り，苦労しながら書いた作品でしたので，受賞の知らせを受けた時は本当に嬉しかったです。今後も読書を通じて，自分の感性を磨いていきたいと思います。最後に，書評を書くにあたりご指導して下さった中西先生と，支えてくれたゼミの仲間に感謝します。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

法学部　2 年次生

松本（まつもと）　美々（みみ）

書 名 ： 『隻眼の少女』

著 者 ： 麻耶雄嵩

出版社・出版年 ： 文藝春秋 ， 2013

「 ミステリーの異端書 」

ミステリー界の異端児と称され，多くの問題作を世に送り出してきた麻耶雄嵩が 2010 年に発表した本書『隻眼の少女』は，その不思議で不気味な世界観と超絶怒涛とも言えるストーリー展開で，2011 年に第 64 回日本推理作家協会賞と第 11 回本格ミステリ大賞をダブル受賞している。

本書の特徴はなんといっても「裏切り」の一言に尽きる。あまりのストーリー展開や結末に読者は必ず驚かされるに違いない。我々が予想する展開は全て裏切られ，全く想像もしなかった結末が待っている。故に本書を読み終わった際には，色々な意味を含んだ溜息が漏れるだろう。それほど「裏切り」が多い本なのだ。

物語の舞台は山深くの寒村，栖苅村。ここは村に洪水を引き起こしていた龍を退治したスガルという女性の子孫である琴折家が代々治めている地である。退治された龍はのちに龍ノ首といわれる岩になり，切り落とされた頭部がその下に眠っているという。そんな栖苅村に訪れたのは，母を亡くし事故で父親を殺害してしまった，大学生の種田静馬。静馬は絶望し，「死に場所を求めて」この地を訪れていたのである。そして龍ノ首を気に入り，よじ登って跨っていた静馬が出会ったのが，自らを探偵だと言う高校生くらいの不思議な格好をした少女，御陵みかげである。みかげは隻眼の名探偵であった母親，初代御陵みかげの名を継ぐために修行中の身であった。この２人と琴折家を中心として物語は進んでいく。

本書は２部構成となっており，第１部はスガルの娘たちが次々に殺され，みかげと静馬が事件の解決に奔走し，一応は解決に至る。しかし第１部から 18 年の歳月が流れた第２部では，解決したはずの事件が繰り返されてしまい，第１部のみかげの娘と再び村を訪れた静馬が共に事件の真相に迫る。

本書を読み進めていていると，その世界観とストーリー展開にただただ圧倒される。まず，栖苅村はスガルの伝説と共に暮らしている。スガルはこの村では絶対的な存在であり，村人は彼女をスガル様と呼び，崇拝している。その様子が現実離れをしており，この空間だけ現実世界から切り落とされたようにも感じる。さらに，みかげの存在も異質なのである。彼女は本書のタイトル『隻眼の少女』通り，左眼は碧の義眼なのはもちろんのこと，「まるで平

安時代から飛び出したかのような」水干姿でいつも扇を持ち歩いている。それでいて毒舌で超上から目線の物言い。このみかげの姿や立ち振る舞いが物語の不思議な世界観をさらに助長しており，一気に異世界に引き込まれたかのような感覚に陥る。さらにストーリーもなかなか異色のものだといえる。解決したかのように思えた事件が 18 年の月日が経って再び起きてしまうし，では静馬とみかげがまた一緒にタッグを組むのかと思いきや，すでにみかげは亡くなっていて，その娘と真相を探ることになる。そして明かされる 18 年前の事件の驚愕の真相。ストーリーの全てが我々の常識から飛び出しており，こちらが予想することが全て裏切られるのだ。まるで必死に考えている読者を裏切るかのように。

しかし，それ故に評価が二分化しそうな物語であると感じた。恐らく，初めて推理小説を読む人が本書を読んだのであれば，かなり混乱してしまうかもしれない。日常世界から切り離されたような世界観に加えて，怒涛のストーリー展開にはついていけないと感じてもおかしくはない。さらに，この物語の真相がある意味突拍子もないものであるため，そんなのありなのか！？と思ってしまう人もいるだろう。いろんな意味でアクが強い作品であるため，好きな人はとことん好きだろうが，そうでない人も一定数は存在する作品であろうと感じた。

しかし，そんな世界観をある意味中和してくれるのが主人公である静馬だ。彼はみかげも認めるワトソン役なのだが，どこか頼りなく少しお馬鹿なのだ。ヘタレな彼が我々読者の目線に一番近い存在であるため，彼がいることによっていいバランスが取れている。主人公の静馬が読者と物語を繋いでいるように感じる。

本当に癖が強く，ある意味ぶっ飛んだ作品ともいえる本書は，さすがミステリー界の異端児と言われる作者が書いた「ミステリーの異端書」であると感じる。不思議な世界に取り込まれたいと感じる人にはぜひ読んでほしい一冊である。

選考委員による講評　　**選考委員代表　法学部教員　若狭　愛子**

書評が書物を紹介・批評する文章であることは，言を俟たないところであろう。紹介は，対象書物のあらすじや作者の情報などを簡潔明瞭に，また読み手の興味を引くように記せば大方の役目を果たしたといえよう。難しいのは「批評」である。批評は感想ではない。客観的に対象書物の長短や優劣を指摘し，それに対する自分の評価を述べなければならない。

評者が取り上げた『隻眼の少女』の作者である麻耶雄嵩氏は，ミステリー好きであれば一度は耳にしたことがあるであろう，京都大学推理小説研究会（京大ミステリー研）の出身である。

さて，本書評であるが，全体的によくまとまっている。作品がミステリーゆえに，結末を明かさないよう，しかし読者が結末に興味を抱くように，あらすじや批評を書いており，特に作品に対する批判的な見解も提示できていて，とてもバランスがいいという印象を得た。

入賞者から一言

この度は佳作にお選び頂きありがとうございます。まさか受賞できるとは思ってもいなかったので驚きました。見返してみると拙い文章で正直とても恥ずかしいです。また機会があればもっと良い書評が書けるように頑張りたいと思います。

第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

現代社会学部　1 年次生

水野（みずの）　孝祐（こうすけ）

書 名 ： 『カラフル』

著 者 ： 森絵都

出版社・出版年 ： 文藝春秋 ， 2007

「 多くの視点と自分らしさを持つこと 」

「おめでとうございます，抽選に当たりました！」

主人公は死後，下界と天上界の狭間で天使であるプラプラに突如言われた。

主人公は前世で大きな罪を犯し，輪廻のサイクルに戻ることができない。しかし，幸運にも抽選に当たり再挑戦のチャンスを得た。主人公は下界にいる誰かの体を借りて過ごし，前世に犯した過ちのおおきさに気付いた時点で終了である。借りていた人間の体を離れて昇天し，輪廻のサイクルに復帰できる。

しかし主人公はその時点で前世の記憶をなくしていた。が，もう二度と下界には戻りたくないという，漠然とした浮世疲れだけが残っていた。「辞退します」と主人公は言った。

しかし，強制的に三日前に服薬自殺を図った少年，小林真の体を借りることとなった。ここから話は展開される。

主人公の小林真は，四人家族である。父と母そして兄である満。兄の満は日常的に真のことを馬鹿にしていた。小林真は中学三年生である。彼は中学一年生の頃いじめを受けていた。中学三年生になるといじめを受けているわけでもなく，もはやクラスの中に存在していないようになっていた。ここまででも自殺をするきっかけになり得るのだが，小林真の自殺の引き金は，九月十日の木曜日にある。塾帰りに初恋の相手である桑原ひろかが中年の男と歩いているところを目撃する。後をつけるとラブホテルに入っていった。それに，ひどく悲しんだ。そして今度は真の母親と一緒にフラメンコ講師が肩を寄せ合い出てきた。さらに，コツコツ頑張っていた父親の会社の上司が悪徳商法で捕まり，上層部が総辞職する。ポストの再編成で平社員の父は部長にまで昇進。そのような昇進に喜んでいる姿に失望。なんて最悪な家庭環境，またなんて最悪な学校生活だろうと，誰もが思う。私も最初はもちろんそう思った。しかし，人は誰でも間違えを犯す。間違えを消すことはできない。しかし，その間違いに気付き，償うことが大切であるのだ。

この本を読んでいると，途中からこの本の結末である，主人公が過去に犯した罪が何なのかがわかってしまうように私は思った。私はあまり本を読まない方なのだがそれでも容易に想像できてしまった。しかし，問題が解決していく過程から目が離せなかった。本を読む手

を止められなかった。とても滑らかにそれぞれの登場人物の問題が解決していき私が思っていた結末に展開していくことにこの本の良さがあったのだ。

この本の最大の特徴は書名にあると思った。なぜこの本の名前はカラフルなのか。それは大きく三つの理由があると思う。一つ目は，小林真が美術部であり，絵を描くことが好きだからであると思う。小林真は，絵を描いている時，美術室にいる時だけ自分の世界に入り込み嫌なことを全て忘れられるのだ。二つ目は，個性が大事であり，みんな違ってみんないいというメッセージを伝えるためである。小林真は，絵が上手という個性を持つ。小林真の母は，自分が凡人であることに悩み自分にも何か才能があるのではないかとたくさんの習い事に手を出す。しかし，どの習い事も長続きしない。しかしそれもまた個性なのだ。平凡な人などおらず皆個性をもって生まれ，非凡である。そして三つ目は，文章に色を使った表現がよく使われているからである。話の大きな転換点では，読み手である私を白黒の活字ではないような気持ちにさせ，脳内に映像が浮かぶほどに色の表現がふんだんに使われていた。

この本を読んで私が学んだことは，１つの視点で物事や，人を判断してはいけないということだ。主観的だけではなく客観的にも捉える必要があるということだ。自殺した少年である小林真は主観でのみそれぞれの登場人物を理解し，１つの視点で捉え，自殺してしまった。が，抽選に当たり小林真として過ごした主人公は，登場人物を客観的に多くの視点から見直し，それぞれの良さ，抱えていた問題を見つけることができた。物事や人を多くの視点から見ることは，自分や友達の間違いを未然に防ぐだけではなく，柔軟な発想にも繋がる。それは社会に出てからも役に立つものの見方であると思った。また，自分らしく生きることが大切なことも学んだ。子供の頃は誰もがみな自分らしさを持っている。しかし，建前で大人になるほど自分らしさを出せなくなる。自分らしさを恥ずかしがらず出すことができれば人とは違うところで自分に自信を持てるようになると思う。平凡な人などおらず皆非凡なのだ。

自殺が社会問題になっている今，この本を読むことは自分のものの見方を変えることができ自分らしさを探し，自分に自信を持てるきっかけになり得る本だと思う。

選考委員による講評　　**選考委員代表　経営学部教員　宮永 健太郎**

「ピュアな書評」，その一言である。著者である森絵都氏が読者に向けて放った，ストレートなメッセージ。それを評者は澱みない心で受け止め，そこで感じたことを自分の言葉で素直に表現している。そこには，森氏のメッセージをひねって解釈してやろうという作為もなければ，森氏の意図を深読みしてやろうという邪（よこしま）さもない。しかもこの書評は，読者の心情に寄り添おうとする評者の優しさで満ちており，読者に向けたあざとい承認欲求のようなものは微塵も感じられない。

評者には，これからも「正しいものは正しい」，「善いものは善い」，「美しいものは美しい」と，自分の心で感じ，自分の言葉で表現できる人間であり続けてほしい。本学の教員の一人として，そして人生の先輩の一人として（？），心から願っている。オリジナリティ？ アイデンティティ？ そんなものは，がんばって毎日を生きていれば，知らないうちに身についているはずさ！

入賞者から一言

この度は，書評大賞に入賞したことをとても嬉しく感じています。

私は今回初めて書評を書いたのですが，初めて書評を書いて思ったことは，感想文とは違いネタバレをしてはいけないが，面白さを伝えなければならないという難しさでした。

また機会があれば参加したいと思います。

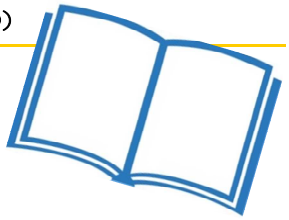
第１５回 京都産業大学図書館書評大賞　アンケートと統計

アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1）なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- 読書感想文とは違い，自分で調べた知識や考えで本を批評することで，その著者や時代背景を知り著者自身と会話するような感覚に感動したから。
- 大学の授業で課されるレポートなどに向けて，自分の考えを上手く伝える文章を書けるようになりたいと考えたため。
- 気になった本を一度読み，考えたことを文字に起こしてみたいと思ったから。
- 自分がどれだけ文章を書けるのか，評価をしてもらえるため。
- 書評大賞への応募経験から，書評を書くことが楽しくなった，再チャレンジしたくなったから。
- ゼミの課題，先生の推薦で。

Q2）書評の対象図書をどのようにして選びましたか。（最もあてはまるもの１つ）



- 興味のある分野だから　30 人
- 先生からの推薦・指示　2 人
- 好きな作家だから　9 人
- 図書館で見つけたから　1 人
- 話題の本だから　5 人
- その他　10 人

Q3）次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」（34 人）（理由）

- 書くのが楽しかったから。
- 好きな本についてみんなに紹介できたし，文章能力もついたと思うから。
- 読書をする視点が変わり，様々な方向から物語を楽しめたから。
- 書評を書くことで今まで以上に本と向き合うことが出るから。
- なかなかこういうことでもないとやろうと思わない経験だから。

「いいえ。」（23 人）（理由）

- 今回書評を書いてみて書くことの大変さを知ったから。
- 就職活動等で忙しくなるから。
- 大学を卒業し，就職するから。

Q4）執筆してみての感想や，提出方法など，お気づきの点を自由にご記入ください。

- 物語を深く読み，掘り下げていかないといいものはやはりできないと感じた。
- 難しかったけど，最後まで書けたので良かった。達成感があった。
- 作家や批評家の文章力や構成力の凄さを知った。自分で文章を書き書評するとなると言葉選びや構成が難しく手を止めることがあった。
- 自分の中の評価が，他人からはどのように見てもらえるかが楽しみ。大学生ならではの時間の使い方ができていると思う。

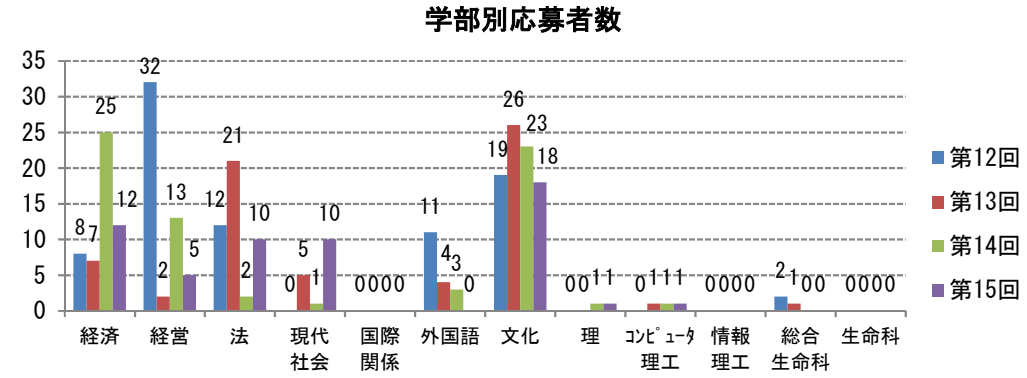
Q5）毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

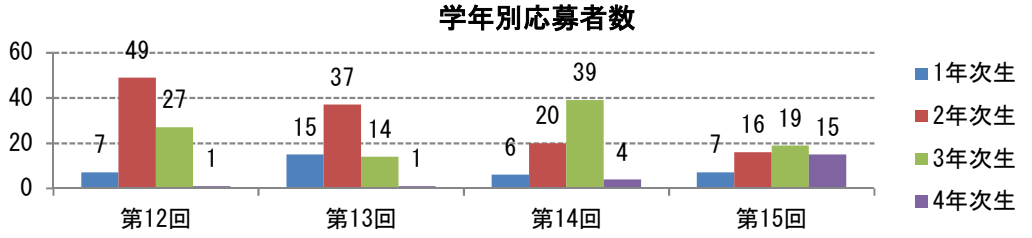
- 講演会は絶対参加したい。大学生目線で話してくださる方がいいです。
- 芥川賞作家の先生方に話が伺えるのは貴重な体験なのでぜひ行ってみたいです。

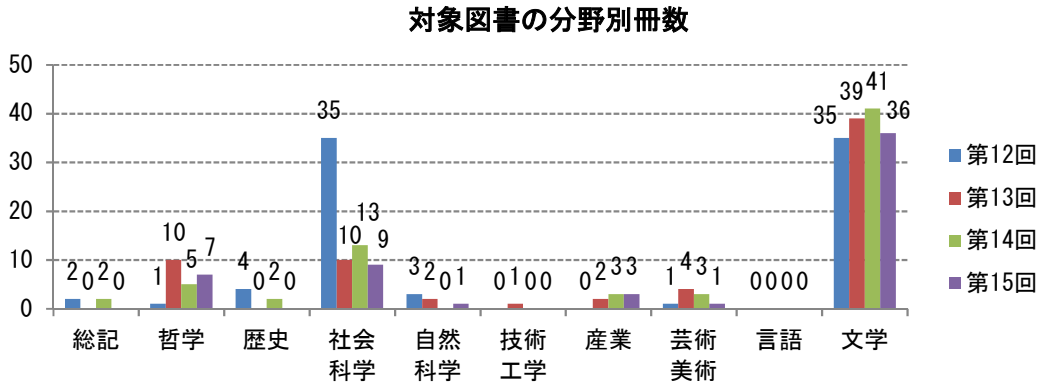
－ 希望する講演会講師（敬称略・五十音順）－

苅谷剛彦・東野圭吾・森見登美彦・山田詠美

統計はこちらです。







書評大賞には56名から57篇の応募がありました。学部別応募者数は文化学部・経済学部・法学部・現代社会学部の順となり，法学部・現代社会学部からの応募が増加した一方で，その他の学部では伸び悩み，外国語学部からの応募が０になりました。また，文系学部学生からの応募が大多数である一方で，理系学部学生からの応募が少ない傾向は依然続いています。文系・理系問わず読解力や表現力は必要ですので，皆様からの積極的な応募を期待いたします。

学年別応募者数は，例年通り全体に占める２年次生・３年次生の割合が多い傾向ですが，過去４年間を比較すると２年次生の応募に減少傾向が見られ，４年次生からは例年よりも多くの応募がありました。毎年書評大賞にチャレンジすることで文章力を向上させ，入賞に至っている学生もいます。読解力，表現力，文章力は必ず将来役立ちますので，ぜひ１年次生から応募してください。

対象図書の分野別冊数では，文学に関する資料の選択が多く，総記，歴史，技術・工学，言語に関する資料の選択が０となりました。書評の対象とする資料の分野に制約はありません。これまで手に取る機会がなかった本とじっくり向き合うことは有意義な体験となります。苦手な分野の資料にチャレンジしてみるのも良い経験となります。次年度も幅広い分野からの応募作品をお待ちしています。

＜第 15 回 京都産業大学図書館書評大賞 概要＞

目的

(1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け，読書活動が推進され，結果として図書館利用を促進する。
(2) 興味ある著作を読みこなし，内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は，図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力，文章表現能力を向上させ，レポート・論文作成能力，情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領（抜粋）

1. 応募資格　京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
   (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
   (2) 使用する言語は，日本語とする。
   (3) 文字数：1篇につき1,600字以上2,000字以内。応募原稿様式は図書館Webサイトから入手(マイクロソフト社Wordファイル)。
   (4) 応募作品は本人のオリジナルであり，かつ未発表であること(盗用厳禁)。
   (5) その他：1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

56 名 57 篇

実施日程

応募期間：2019年７月１日（月）～ ９月３日（火）
入選発表：2019年11月28日（木）
表 彰 式：2019年12月18日（水）

＜選考委員より ひとこと＞

大賞受賞作は「文学を読む」という経験の持つ力へストレートに訴えかけるものになっていたと思います。この書評大賞をきっかけとして，一人でも多くの本学学生が文学を読む楽しさに目覚めてくれたらと思います。**（菅原）**

個人的には，書評を選考するのは好きではなく，書評の価値は，多くの人がその書評を読んでその本を読んでくれればいいと思っています。ただ，今回応募していただいた皆様には，貴重な時間を使っていただいて感謝しています。**（瀬川）**

君の胸から出たものでなければ，人の胸を胸にひきつけることは決してできない（ゲーテ『ファウスト』）。これからも“何か”をクリエイトし続けてください。**（宮永）**

さまざまなジャンルの書籍に親しみ，深く読み解くと，狭くなりがちな日々の心も広くなりますね。これは，皆さんの作品とそこで取り上げられた書籍を読む機会をもらった私自身の実感でもあります。ありがとう。**（山本 和）**

皆さんの書評を読み，新たな世界が広がるのを感じました。歳を経れば思考の柔軟性を維持するのは難しくなると言われますが，嗜好も偏りがちになりがちです。この選考は，そんな私に新たな関心を呼び起こしてくれました。**（若狭）**

今回の入賞作品は全て小説で，応募作品の半分以上も小説でした。対象の本を読んでみたいなと思わせてくれる作品もありましたが，一方で，もっと専門書を読んで評することにチャレンジしてほしいとも感じました。**（天笠）**

今回は，型にはまったような構成が多かった印象を受けました。もっと自由に表現してもよいのでは？　今年から本学も参加している書評専門紙 週刊読書人による「【書評キャンパス】大学生がススメる本」コーナーもぜひ参考にしてください。**（今井）**

皆さんは新聞の書評欄を見たことがあるでしょうか。これらの書評に共通する点として，「説得力」があると考えます。自らの本に対する意見・考えを読者に納得・共感してもらうことを意識して文章を書く癖をつけてください。**（島田）**

入賞された方，本当におめでとうございます。力作ぞろいで評価に苦労しました。また，今回惜しくも入賞を逃した方についても，まずはチャレンジしたということが評価されると思います。これに懲りず今後も活字に親しんでください。**（鈴木）**

今回の書評大賞は，どの作品も拮抗しており，採点するのが難しかったです。しかし，その反面，個性的な作品，突出した作品が少なく，少し残念でした。たくさん図書や書評を読んでください。ステキな書評作品が応募されることを期待いたしております。**（山本 一）**